

聖書:列王記第二 4章29~37節

説教:私は決してあなたを離しません

はじめに

いつものように前回のあらすじを振り返ってから今日のところに入ってまいります。話しは、シュネムという町に住んでいた一人の女性が、預言者エリシャを食事に招くところからはじまります。この女性はエリシャと何度か話をしているうちに、これはきっと神の聖なる方に違いないと確信し、エリシャのためにわざわざ部屋を作り、自由に使えるようにしてあげます。エリシャはこれを見て、何か礼をしたいと思って尋ねたところ、女性は「私は幸せに暮らしているのです」と言って何も受け取ろうとしません。それでエリシャは、この女性に子どもがいないことを知って、「来年の今ごろ、あなたは男の子を抱くようになる」と語ります。それを聞いた女性は、当然のことですが驚き戸惑って、「このはしために偽りを言わないでください」と言って、本気にしようとしません。ところが一年経ってみると、エリシャが告げたとおりに男の子を産むことになりました。

話しがここで終わってたなら、「ああ、それはよかったですね」で済んだのですが、この男の子が大きくなったときに、大きな試練がやって来ます。おそらく幼稚園か、小学校の低学年くらいの年齢だったのでしょう、父親と一緒に畑に行き遊んでいたときのことで、急に頭が割れるように痛み出し、「頭が、頭が」と言ったきり意識を失って倒れ、それからわずか数時間後に、母親の膝の上で死んでしまったのです。

それまでこの女性は幸せに暮らしていました。働き者の夫もいるし、生活も満たされ、聖書には裕福な家だったとも書かれているくらいです。そこへ長年祈っても与えられなかった男の子が思いがけず与えられたのですから、自分は本当に恵まれた者だと、神に感謝していたのだらうと思うのです。そこへ、このような試練が突然ふりかかってきました。

母親はどうしたのでしょうか。エリシャの部屋の寝台に子どもを寝かせ、夫に「シャローム」と語り、カルメル山のところにいたエリシャの元へ走りました。そしてゲハジから、「お子さんは無事ですか」と問いかけられたときも、同じように「シャローム」と答えます。

1 「気休めを言わないでください」

子どもは死んでしまったのに、母親が「無事です」「シャローム」と答えたことについて、少し補足しておきたいと思います。

母親がなぜ「シャローム」と言ったのか。頭が混乱していたのではないかという人もいますが、そうではありません。では、子どもは必ずよみがえる。そのような堅い信仰を持っていたのかと言えば、それも違います。

おそらく、もっと複雑な感情を抱えながら「シャローム」と語ったと思われます。わかりやすく言えば、「いったい、どうしてくれるんだ」という神に対して、またエリシャに対して怒りながら「シャローム」と言っているようなのです。そう考える理由があります。28節を読みます。

「私がお主人様に子どもを求めたでしょうか。この私にそんな気休めを言わないでくださいと申し上げたではありませんか。」

さきほども申したように、エリシャが「何か礼をしたいのだが」と尋ねたときに、この母親は何もいりませんと答えていました。「来年の今ごろ男の子を抱くようになる」と言ったのは、エリシャのほうからです。それを聞かされたとき母親は、「そんな嘘は言わないでください」と言って取りあおうとはしなかったくらいです。それが思いがけなく男の子が与えられたのですから、この夫婦は手を取り合っただけで喜んだでしょう。ところがその子どもが突然に亡くなっていくのです。

皆さん、どう思われるでしょうか。誰だっけ考えるでしょう。いったい神とはどのような方なのか。そんな疑問が湧いてきます。人を喜ばせておいて、途中で取り上げる。神は、私たちの人生をもてあそんで楽しんでいるのでしょうか。絶対にそんなはずはない。神は真実な方のはずではなかったのか。でも、いま子どもが死んだという現実を前にして、神のことがわからなくなってしまいました。とても「シャローム」という気持ちになれないはずで。

でも、ここで「シャローム」と言わなかったならどうなるのでしょうか。子どもはよみがえらないということになります。本当によみがえるのかどうか、確信はありません。けれども、よみがえらないと思ったら、もう子どもを取り戻す手立ては何もありません。それで「シャローム」と言っているのではないのでしょうか。

でも、口ではそう言いながら、心の中は不安でいっぱいです。神はどのような方なのか。そのことをはっきりさせるために、エリシャの所に急いで向かっていきます。

## 2 あなたを離しません

### 1) なぜ

今日の箇所に入っていきます。エリシャは、母親から事の次第を聞くと、すぐに子どもの所へ向かうことにします。しかしエリシャはこのときすでに高齢で、速く歩くことができません。そこで若者ゲハジに、自分の杖を持たせて先に行かせることにしました。

その様子を見ていた母親はどうしたでしょうか。普通なら、一刻も早く子どものところに戻り、生き返るかどうか自分の目で確認したいと思うのではないですか。ですから、ゲハジと一緒に先に行くという判断をするはずで、ところが母親はゲハジとではなく、エリシャと一緒に行くという選択をします。その理由について、母親は30節でこう言うのです。

「主は生きておられます。あなたのたましいも生きています。私は決してあなたを離しません。」

エリシャの足にすがりつくようにして、絶対に離すものか、というような勢いです。たとえ子どものところに着くのが遅くなってもかまわないとまで覚悟しています。なぜここまでエリシャから離れようとしないのでしょう。

「主は生きておられます」という言い方は、日本式に言うなら、「天地神明に誓って嘘は言いません」というような、何かを誓うときの決まった表現方法だと言われます。ですから母親は、「天の神に誓って、絶対にあなたを離しませんからね」というような意味で言ったことになります。

それはわかったとしても、わからないのは、母親がどうしてこんなふうな誓いを立てたのかです。どうしてもエリシャから離れたくなかったという気持ちなのかもしれませんが、もしそれだけだったならば、別にこのような言い方をしなくても、ただひとつ「私はエリシャと一緒にいきます」と言えばよいことです。どうしてだろうか。ここだけを見ていても、何の手がかりも見つかりません。

### 2) かつてエリシャが誓ったことば (2章2節)

そこで、もっと別のところにヒントがあるのではないかと思って探してみます。そうすると、母親が語ったのとまったく同じ表現が同じ列王記第二

の2章2節にありました。エリシャの先生であるエリヤが、もうすぐ竜巻で天に上げられようとしていたあたりのことです。その話の流れの中で、エリシャはエリヤにこう言うのです。「主は生きておられます。あなたのたましいも生きています。私は決してあなたから離れません。」

さきほど母親がエリシャに語ったことばと、かつてエリシャがエリヤにかつて語ったことば。まったく同じです。これは偶然でしょうか。(間)いいえ、そんなことはありません。では、これはどういうことなのでしょう。

### 3) 母親が思い出す

前回も触れたことですが、エリシャはシュネムの女性に招かれて何度か食事を共にしているときに、いろいろな話をしてくれました。かつてエリシャの先生であったエリヤがどんな預言者であったのか。どんなことをしたのか。そんなことを詳しく教えてくれたました。シュネムの女性はそれを聞いていて、印象深く記憶に刻んだ話しがいくつかあったようです。

その一つとして覚えていたのは、エリヤが世話になっていた家の子どもの亡くなった時の話です。エリヤは、死んだ子どもを抱いて自分の部屋に入り、寝台に子どもを寝かせて、よみがえらせた。エリシャはそのときのことを詳しく話してくれました。その話を聞いたとき、母親は「そんなこともあるのだろうか」と半信半疑でした。しかし、いざ自分の子どもが亡くなってみると、真っ先に思い出したのはこの話だったのです。とにかくエリヤと同じようにしてみよう。それでエリシャの寝台に自分の子どもを寝かせました。

これとは別に、エリシャが語ってくれたことの中で、もう一つ印象深く覚えていた話がありました。それが先ほど見ました2章2節の場面です。あるときエリヤは、エリシャに「これからベテルに行くけれど、あなたはここにとどまっていなさい」と言います。ところがエリシャは、自分は預言者として未熟者だということを自覚していましたから、先生がいなくなる前に一つでも多くのことを学ばなければと必死です。ここで待っていたら、先生から学ぶせつかくの機会を逃すことになります。それでエリシャはこう言ったのです。「主は生きておられます。あなたのたましいも生きています。私は決してあなたから離れません。」それを聞いたエリヤは、苦笑いしながらエリシャをベテルに連れて行くのですが、その先を読むと、これとまったく同じやりとりが二回出てくるのです。ということは、

エリシャは同じセリフを合計すると三度繰り返したことになります。母親は、そのセリフをエリシャから聞いていました。それで覚えていたということなのでしょうが、ではどうして、母親はエリシャ語ったのと同じセリフを語ったのでしょうか。

#### 4) 神の臨在に触れる

ここで大切なのは、エリヤとエリシャがその後どうなったかです。この後、エリヤは竜巻によって天に上げられていきます。エリシャはその竜巻から目を離してはならないと言われていましたから、恐ろしいけれども、とにかくじっと見ていました。そうしたら、エリヤとエリシャとの間に、火の戦車と火の馬が現れたのが見えます。エリシャは、たとえどんなことがあってもエリヤから離れるものかと心に決めていました。でも、火の戦車と火の馬を見たとき、絶対に自分はエリヤと一緒に歩くことができないと悟り、それと同時に、自分はここで死ぬかもしれないと覚悟するのです。なぜかと言えば、そこに神がおられたからです。神を間近に見た者はどうなるかご存じでしょうか。どんな預言者も、きよい神の姿を見たとき、一瞬にして自分の罪深さを知らされ、もう生きることができない叫んでしまう。そういう話しが聖書に何度も出て来ます。エリシャもそうでした。

ところが竜巻が去って、ふと我に返ると、どうなっていたでしょう。死んでいません。生かされています。そればかりではありません。ヨルダン川の岸辺に立ったときのことです。エリヤが残っていた外套を手にとって、思いっきり水を打ったら、水が両側に分かれました。それまで、このような奇跡を行うことができたのは、エリヤだけでした。それで初めて気がつきました。神は自分の罪を赦してくださったばかりでなく、エリヤに続く預言者として立たせてくださった。そんな話しをしてくれました。

母親がエリシャに、「私は決してあなたを離しません」と言ったのは、このことと関係しているようなのです。ではどんなふうに関係しているのか。もう少し深く母親の気持ちを考えていきます。

### 3 信仰

#### 1) 主にしがみつく

母親は今、死んだ子どもを救いたいと必死です。同時に心の中は、「なぜ、どうして」という気持ちで一杯です。もっと本音を言えば、「一方的に子どもを与えておいて、また一方的に取り上げようとする。それが神のなさることなのですか。神はその

ような気まぐれな方なのですか。それともあわれみに富んでいる神なのですか。どちらが本当なのか、それを知りたい。」そのような怒りと疑問がふつふつと心から湧いてきて、おさまらないのです。

この気持ちをエリシャにぶつけようとして。何しろエリシャは、「来年の今ごろ、あなたは男の子を抱くようになる」と語った当の本人なのです。この疑問をエリシャにぶつけて、本当の答えを引き出すまで、絶対に離さない。そう決心しました。このときの母親の気持ちを解き明かすとこんなことばになるでしょう。

「エリシャさん。あなたはかつて、エリヤ先生に、『あなたを離しません』と三度誓ったら、そのあとでエリヤを通して神に出会うことになり、神の奇跡が起こす力が与えられ、預言者として立つことになったと教えてくれたではありませんか。いま、私もあなたが語ったのと同じセリフを言わせていただきます。『私は決してあなたを離しません。』さあ、今度はあなたの番です。あなたを通して、私が神に出会う番です。私に神の奇跡を見せてください。もし神が気まぐれの神ではなく、あわれみに富む真実の神であるなら、私にそれを見せてください。それを見るまでは、私は決してあなたを離しません。」

#### 2) 熱心な祈りと思い

このあと何が起きたのかは、読んでおわかりのとおりです。エリシャが子どもに対して行っているいろいろな動作がどのような意味をもつのか、私には解説できる知識はありません。ただ確実に言えることは、母親の熱心な祈りと思いが神に通じ、母親の信仰に込めてくださったということなのです。

いま「熱心な祈りと思い」と言いました。でも、これまで見ておわかりのとおり、母親を突き動かしているものは、元をたどれば、結局「神への怒り」です。「子どもを与えると一方的に約束したのは神ではありませんか。その神が、一方的に母親から子どもを取り去る。そんな理不尽なことがあっていいのか。」そのような怒りと強い疑問です。

これに対してエリシャは、あなたの信仰は間違っているとは言いません。すぐに子どものところへ向かわなければならぬ。子どもを救わなければならないと決断し、家に向かいます。神も、この母親の信仰に込めて、子どもをよみがえらせることに

より、この方が、あわれみに富んだ真実の神であることを示してくださいました。

### 3) イエス・キリスト

これらの出来事から、私たちは、イエス・キリストの身に起きたことを思い起こしていきます。

神のひとり子を救い主として私たちのところへ送ってくださると一方的に約束してくださったのは、父なる神でした。そしてその約束のとおり、およそ二千年前にベツレヘムの町でマリアを通してお生まれになるのですが、最期は十字架にかけられて死んで行かれます。神ご自身が、私たちに救い主である方を与えてくださったのに、神ご自身が今度はその方を、私たちの罪の身代わりとしてさばき、そのなきがらは墓に葬られていきました。

もしイエス・キリストにまつわる話しがそこで終わっていたのなら、神は気まぐれな神であった、ということになります。結局、何も解決はないままです。もしそうであるというのなら、むしろ救い主など来ない方がまだ良かったとさえ言えるでしょう。

しかし、どうでしょうか。話しは墓に葬られて終わりではありませんでした。この方が三日目によみがえられたことを私たちは知っています。

### 3) 神の愛が

それはなにを意味するのでしょうか。神はどのような方なのか、です。あの母親が必死エリシャにしがみついて、神はどのような神なのか、と問いかけたように、私たちも試練に出会ったとき問いかけるでしょう。「あなたは私たちを苦しみにあわせて楽しんでいるのですか。私たちを救ってくださいと言いながら、実は心変わりして、救いはない。そのような方なのか。」そんな疑問をぶつけたくなる時があります。もう信じることができなくなるときさえあります。

すぐに答えがあるわけではありません。もしかして、地上の生涯を終えるときまでなんの手ごたえもないままかもしれません。けれども、私たちは気落ちすることがありません。なぜでしょうか。ローマ書8章39節にこうあるからです。

「高いところにあるものも、深いところにあるものも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」

私たちは弱くなって、神から離れたくなる時があるかもしれませんが。しかし神の愛は、もっと

強力です。引き離すものは何もないと言われてます。変な言い方ですが、神から離れようと思っても離れられないのです。

今日の箇所。母親の信仰が立派だったという話しではありません。子どもを亡くしたときでさえ、神の愛は変わらずに母親に注がれていました。神にしがみつくようにと導いておられたのです。神の愛があったからこそ、本当の神に出会うことができたとも言えます。私たちも同じです。

「あなたがたも、この方にしがみつきなさい。神の愛が私たちを包んでいるのだから、あなたがたは決して神から離れることがない。」と、主は語ってくださいます。